

抗がん剤にはどのような副作用がありますか。また、予防法や対処法はありますか。



抗がん剤の種類によりさまざまな副作用がありますが、それぞれに対して有効な予防法や対処法があります。副作用の出かたや程度には個人差がありますので、医師・看護師・薬剤師とよく相談してください。

解説



抗がん剤の主な副作用 **表1** としては、吐き気・嘔吐^{おうと}や脱毛、白血球減少などがあります。これは、抗がん剤が増殖の盛んな細胞を攻撃するため、正常細胞の中でも増殖の盛んな細胞、例えば消化管や髪の毛の細胞、白血球を作っている骨髄が攻撃された結果起きたものです。ただし、副作用ががんに対する効果のバロメーターになるわけではなく、「副作用が出なかったから、がんに対する効果もなかった」とか「副作用が強かったから効果もある」というわけではありません。

吐き気・嘔吐

吐き気(むかむか)・嘔吐(吐くこと)は、消化管粘膜や嘔吐に関係する脳の一部が刺激されるために起こります。抗がん剤を使用した直後から24時間以内に現れる急性の症状のほか、24時間から1週間ほどの間に起こる遅延性の症状、精神的なものが原因となって起こる症状(薬を用いることが心配になり予測して吐き気や嘔吐が起きること)があります。

吐き気や嘔吐は、すべての抗がん剤で起こるわけではなく、症状の強さは抗がん剤の種類により異なります。

吐き気・嘔吐の対策としては、抗がん剤の症状の強さに応じて吐き気止めの薬を適切に用いることが大切です。アドリマイシン(アドリアシン)、エピルビシン(ファルモルビシン)、シクロホスファミド(エンドキサン)など比較的吐き気の強い抗がん剤を使用する場合は、抗がん剤の点滴の前に予防的に吐き気止めの注射をします。また、家に帰ってからの吐き気・嘔吐に対して、5HT3受容体拮抗薬^{ふく}、副腎皮質ステロイドホルモンが吐き気止めとして処方されることがありますので、内服の方法を医療者と相談して、症状にあわせて使用しましょう。一つの薬に効果がなくても別の薬が効く場合もありますので、吐き気が治まらない場合は医師に相談してみてください。

好中球減少・貧血・出血

抗がん剤の影響により、骨髄(血液を細胞を造っているところ)が影響を受け、血液の中の白血球、赤血球、血小板が低下します。

白血球の中の好中球は病原菌と闘う役割がありますので、これが減少すると、病

表1 主な抗がん剤の副作用一覧

一般名(略号) [主な商品名]	骨髄抑制	嘔気	脱毛	その他
シクロホスファミド (CPA・CPM・CY) [エンドキサン]	◎	○	○	出血性膀胱炎・抗利尿ホルモン不適合分泌症候群(SIADH) 肺線維症
メトトレキサート(MTX) [メソトレキセート]	○	△	△	肝障害・高用量で腎障害・神経障害
フルオロウラシル(5-FU) [5-FU]	○	△	△	下痢・口内炎・小脳失調・心筋虚血
テガフル・ギメラシル・オテラシル (TS-1) [ティーエスワン]	◎	△	—	下痢・口内炎
カペシタビン [ゼローダ]	○	○	○	手足症候群：○・心障害・肝障害
ドキシソルビシン (DXR・ADR・ADM) [アドリアシン]	◎	◎	◎	心毒性
エピルビシン(EPI) [ファルモルビシン]	◎	◎	◎	心毒性
ビノレルビン(VNB・VNR) [ナベルピン]	◎	△	—	静脈炎・腸管麻痺・間質性肺炎・気管支痙攣
パクリタキセル(PTX・TAX) [タキソール]	◎	△	◎	アレルギー反応・末梢神経障害・心障害
ドセタキセル(DTX・TXT) [タキソテール]	◎	△	◎	浮腫・発疹・アレルギー反応
イリノテカン(CPT-11) [トポテシン・カンプト]	◎	△	○	下痢：○
トラスツズマブ [ハーセプチン]	—	—	—	発熱：○・悪寒：○・全身倦怠感 infusion reaction・心不全

*骨髄抑制：汎血球減少・白血球減少・好中球減少・ヘモグロビン減少・血小板減少・貧血・出血など
◎⇒特に注意すべき副作用 ○⇒注意すべき副作用 △⇒軽度の副作用

原菌に十分抵抗できず、肺炎などの感染症を起こすことがあります。しかし、実際に感染症を起こすことはまれで、感染症が起きたとき(発熱など)は、抗菌薬などで対処します。好中球が減少しただけでは、特に何か症状があるわけではないので、それほど神経質になる必要はありません。「白血球が減って、免疫力が下がる」という説明を聞いて、「免疫力を高くする代替療法をやらなくてはいけない」と思う人もいますが、その必要はありません。好中球は、一般に抗がん剤使用後7～10日で減少しはじめ、10～14日くらいで最低値となり、3週間ほどで回復します。この間の日常生活では、手洗いやうがいをする、人が集まる場所はなるべく避ける